

たまいたま 川柳



巻頭言

罪といふこと

願法みつる

偉人には寡黙な人が多かったような歴史だが、勝海舟は良く喋ったお人であろう。「氷川清話」を読む限り、よくもまあと感心するやら呆れるやら。そんな中から、彼が治安を守る責任者だった頃、収監の罪人を一挙に放免したという。その理由が、今更五十人やそこらの悪を断罪しても、世の中にはもっと多くの悪がいるよ……と言ふ事らしい。肚の据わった観方ではあるが、罪といふものの業の深さを、しみじみ考えさせられる昨今の世情ではないだろうか。

海舟の時代以降、法律国家になってゆき何事にも法令で人間の在り様を規定した。徳操の時代から法令の時代になれば、罪で括られる人間さまが増えるのは当然だ。政治がギスギスしてきて、民は、縦横斜めに気を使いながら生きて行かなければならなくなる。

しかし世の中面白いモノで、人間の本能的な欲の在り様を法令で許してくれる。賭け事であったり勝負事であったり、競い合いの存在を認めている。つまり罪にならない程度の悪で息抜きをしないと言ふことだろう。

川柳とやらの娯楽世界でも、罪にならない嘘っぱち程度を楽しんだら如何・・というのが海舟流の考え方も知れない。しかし現実には、川柳することの内容ではなくて、人間関係の在り方こそが罪深いような気がする。

日日是好

願法みつる

知つてなお日々繰り返す愚痴幾つ

意地悪な水は濁つて映らない

着飾ったカラスに白は似合わない

自惚れが善人面をして転ける

土砂崩れそこに土竜は居なかった

雲ひとつあの世へ無心旅衣

相老いの樹にそれぞれの苔模様

生きたいか生きたくないか亀に問う

自画像の筆に本音を見透かされ

平成28年

11月号 (No.684)

日川協加盟